長うた八

泉市

夢合延壽佛全

獏の圖

あの獣を枕及び衾に画けば悪夢を喰と
いふ人り獏本字貘に作る和名を
ちちあうつめ一とりふ熊に似て

象の鼻犀の目牛の尾虎の足
とゝり唐の世多く画て屏ふ作る
瘟癘邪を辟ると白氏文集にいへり

夢の説

ゆめの流さあぐありて見を忘れとうに破る
人ありと以ども其れ知ふ
間れ知ふ義を知れり
漢の子そ知れまとて
三公のくらゐ不進を乗の
夢を八筆ゆふ花さくと
見て古人の秋歩の話文
の幸人と云れり妄ふ
義義とのを見ゆ
へゝゝゝ但ゝゝ ゆめふ天
義とてゝの見あり
左のごとゝ

△天地の部

天八日月星雲雷雨のこと地ハ山川
林野或ハ人事後進化の事あり

○日の出を夢ふ見れば大ふよゝゝ
見るへあゝゝと知べゝ但ゝ男女とも同じ事り
○月ハ人の異まこ八日の光りをむく雲のあふ
見れば用うへの人よりふをくをうけ又八人の使ふ
こゝ月のうへ異ることあきべよくゝつゝむべゝ
○天ふ人ふの雲たるびきあるい花さう者樂世の
見ゝ見べきゝ
ゝゝゝ但ゝ佛果をえて義仏のゆめあれ沙つい
ちう傷ふちあ
○月星晴天ふあゝゝるとうれ男八ふ上の結義中て
むゝんゝゝ九のまゝにるゆひ仕合よゝ用うへの人をつのく
よりん身ふせつふゝて雲陰をちゝへ仕よくあり

○一ふ霊夢これハゆめ
くの神ほとけまします
古人先祖などの夢中
にあらはれて吉凶を告
げしめ給ふなり
○二ふ実夢これハその
おもひおもふことを
ゆめにみるなりそのちも
善後たがはずおほく
うるさのへだてのうちう
おもひをあらはすこの
夢なり
○三ふ心夢これハ五臓
こころおもひにとあらはれ
いおろくに現ひしこと

○月のさえたるを見れバ男女とも大吉なり　立身のうへ
女ハ良夫あよくつゝんとひろよろこびあり大切なるべし
をうる妙のあつまりふくぜつごとおとり不興をまぬかるゝあらん
○星のとびうるをみるハおよそ家業をかさねる男女ともに
よくつゝしむべし　これをそむくとさハ
たるのたてりて身の上滞ることあるべし
○雪ふりありたりけを見れハ天地のめぐみをうけてゆうしん
しあはせあるひハおもひおよばぬ福徳をさづかることあるべし
○大水ふりてたちまち金方をもうし　あるひハ大あ
ふりあるにけんかにてたちまちたすかること一日の大事
ても一ゑてにすぎてひねぐれハよくよくつゝしむべし
まごころをもちゐるべし　家中不和となることあれバ
よくよく相そてつしもち人ようふすべし
○大風ふくとみれハよろづのことにまよひをなせば
おもひうたがふことをすて

あどをころられ実夢
ふあらぎれハそんざふ
あしよつむ
○四ふ虚夢これハゆめ
おひふ心夢とおなじ
ゆうにして神仏のをしへ
ろへよりさねくの夢
をうかるあるひハ実夢ふ
あらず
○五ふ雑夢これハおのれ
がこころのまよひまよひ
妖かんより天きんぐ
ざいそうたるもあるよる
あるひハうたしんきなる
せあどしるうまくハ

吉なりあるさるひとよし　もし子をもつのぞみあればさきはまま
ふけたるなりてまんし　病　ぐるしハ大事なし
○虹をみるときも一切のよろづまでこの中にあすなを止とすべく
家のびすまれバそのたび従し　三日のあいだふしむなこと
ゆとむべうくバおのひあるそんもうあり
○たつまき山のうへにおこるハまことに家のむすめにのぼりあるとされバ
つきあくらうたえバして家人のまたよふきうをうけ浪人ず
てあるべし　まつ国中の人にそのままはならされてあゆく
きるのありよくよくきんぐくそつしむべし

よき妻をまうくる也
いつくしみのなかめ
なるべし雑義とあづく
これ一向よろしからず
○唐の陰陽家あるひは陽
雑卦に吉凶を避んと
するに秘神の咒を
さ(く)べし吉凶を消
くらふ

婆珊婆演帝

右の咒をとなへてわる
べしとなり
まさ(に)くいかけるの

○まうくる山のあるひは峠などよりおりるときかれは下勝なり
人はまち位君子ふまりきちむかられて仕合よくまうしんなり
せすべしまち位君子の田地をもとむればよろしからず
○大よくある山のけいのまちをもろしおひするときは気
などふ出あひてまちをおそへられ文はくすりなどをさづけ
それよりよかちちへ出るときけれはまうさん人は気
けてまひふよく身を定めさて見しん君を揚べし
○山ふかきところにある家もたれはまづひのぞみの事
あきなひとふ増らひむんすとまたきはあれはむまちへ
してもせんと利かへするにあるべしたん気の人はならず
仕そんそるにしあれはよくつゝしまてよし
○泉水築山などのけしきまろ大花見に山ふきることなき
るとけれはそんしのをつくさまりまうし家の杉入あり花ちるを
見れはおもへるあれあるひはたのそこにさるゝ人の別ることを
ありよく羽じんすべし

なかのあしき夢を見ると
しくゝむのすゝみを
ふもまうらんそれ
あさひいびのう風あき
がさそ聞ふまちあれは
あしきあかを避
いへり

○ぶつしんかさまりの田あれはけがあるともおもわてを利じんをへし但
かくまりの夢は名を四方へ発するの象ふして吉なるへしなど
そもちろんもうらずよしといへり後ゆわり
○海川の家みあらくして遊ぶ事とみるときは実物あひは
ちうしき中ふくせらるへ とつへしむべし
○おまじくある事をかうしてせつかくと事をむすれは万事
ところの家ひて仕合よしあされども水は風ふあつく散るあ
あればうらより形気のみぞうるおはにつゝしかんように事など
○大河の水鏡てひろくそとあんてみをうれはてんまうとるなり
その人は間に一の人はおひろいたでそられて大吉事なり
むんとひろくへ浄かふして黄をさらすき事なとくもんし
○ある山の岩ふとりつきのぼりて文はふしもの味を見て気かつき
かるなきまあるとびあらくまうの義をうるときは心のうち
ちうりてくは不勝まうにとあれは男女ともあくつよきそよし
但しつよくもの事ごとしてるてうの事のあんてあせを

夢吉凶の例

人皇十代崇神天皇の十八年夜四月晴月の光を以て宮に夢を合し給ふこれより吉凶夢といふもの始りて夢を合せて天子の[illegible]んやとおもひはじむる[illegible]夕ひて利兄の[illegible]城今と[illegible]の[illegible]子[illegible]事とを[illegible]て信ける[illegible]汝ら[illegible]を[illegible]しむと[illegible]夢をみても[illegible]天子を[illegible]

あしきゆめをみるとも よくよく心して時をさへ見もとあるべし このきんたんの例は かくいふ雑夢とあるべし

○橋かけんまたは橋を渡るとみれば他人を世話する事の家運またはうれしきことにて名聞の位を進むる事あり 又涼風すゞ[illegible]

○宅の内に井戸ありと見れば大きによし 旅かけて居宅を広げえん家すの人 又女の吹笛ふりて男を恋ふことあるべし

○井戸に人落ると見れば家の外へ出ることあり 旅へ失ふことあり あさくし見るも中もかずんすべからず

○井戸の水あふるゝと見れば智術の商をつかどる 家んよし しかして長生すべし 子がければ旅中の病を出て 家あり 女の嫁あるべし 門の水あふるゝとみるも同事なり

○普請家造するとみれば仕合よくいでたる事あるべし 吉夢なり[illegible]と[illegible]の志[illegible]家来する[illegible]ものゝと森の[illegible]にん[illegible]とげ[illegible]て破[illegible]を生ずる

たまご[illegible]より[illegible]汝ら[illegible]のゆかを[illegible]て[illegible]て[illegible]を[illegible]のくゆめの[illegible]むさ[illegible]へしとありぬれば二[illegible]を[illegible]て[illegible]あり[illegible]じ[illegible]て身を清め神明を[illegible]アそ[illegible]ひその[illegible]帝のあへ出て奏し[illegible]まづ兄の[illegible]城命の[illegible]ら[illegible]山のぼり東の[illegible]ひて[illegible]び捨たま[illegible]刀を

○株分けする杯を見れば大きによし 又[illegible]を[illegible]も大吉[illegible]男女とも[illegible]十分[illegible]しんする事あり

○[illegible]をぬるとみれば風邪[illegible]涙を[illegible]すべし 二重[illegible]腰の[illegible]へ生れ[illegible]人へその[illegible]くもりを[illegible]し[illegible]くすべし

△人倫の部

人のさまざまなる事ゆめを説くげつごとのそくひもとの部に入る

○[illegible]を[illegible]すればあ[illegible]との[illegible]ねる[illegible]このところ[illegible]てよしといへども[illegible]ならび[illegible]敵[illegible]きつおくれ[illegible]の[illegible]ひ[illegible]かく武術の

○福[illegible]とみるは大きによし[illegible]とり[illegible]けいを[illegible]むるは[illegible]くあるべし とみれば大きに福をえ[illegible]すべし 但し金銀を引[illegible]とりうるとみるはよろしからず[illegible]府のそん

まるはとみてはこびふ
陰中の陽同志は同じく
陰むろ山ふのぼり四方
に縄を絶へて棄たる舎
む種を取てふとみをと
あらせされば本事とゞたし
うち常しからひて陰
来をにむかひて東の方
を治むべし物へとも天
下ふ主るの象あり
四方ふのぞんで後が
くるを後べしと作
らして是ふ陽同器
をまつるやうち宝
めぐふとそう

志つをかうぶるとなるべし
○万民をみ生ハてらいさをまうくにとあるべしもしまた
こゝろざしたしかならざる人ハ刻かるを破り旅失あるべし
○そのぶんに豆をまくとすれバ五穀生じ世の法を引出し
次第ふ吉兆ふむかつてゆくあり今身のしやうにてたるらん
とするところハよけいにうしなし
○法備前をきをねらぬ金銀を徒けん
ためをすれバ志かしき中より世に見をひらけられ不足のもの
より来たるハそんのあるゆへよくこゝろ射て是を防ぐべし
○火のみにゆくゆまくハ火のさうんふもゆかくてつかされ疑あ
の志ん五のうちにてうのことありといふまられども万物のうち
いきるひよさきの火ふ志くハ病毒ハたひふあらしん後
産の象とも寡すべし但しき氣ふし淫血すくヽ酒ぎる
人ハ火を養ふ本るゆゑありこれも一際ふハ論しがたし
○歯のぬけくるを夢ハ凶夢ふして親族ふかゝハる象へ上高い

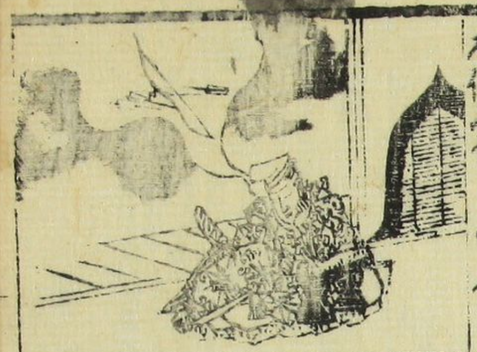
○源頼光は武勇か
ふ良あらくおそれしるる
ぶあるとは一騎の義
のうちふともの座
女あらうそうをいましめ
ゆへにこゝにて賢者と
咲ハほめく女あり
思ひ父母ふ巧をすそ
両家の和ふやうあるぎ
美きを祝ぎりなるる
ある樹の楼様を
刻みと其御をうすく
いとこいへども後代
御をまもくつくる
その名ハまき

父母かゝること不断ハ世ふく気とり志かられども子られ子をの
系有りといふものゝしく悟んずべし
○芝居見物あるひハ風呂ありをきて大勢あつまり媛へ
しく酒ありを愛し其の中にまじりそれのしかむとすれども
男女ともに目上の人ふうと道ましていて災ち
色情ふより女ハ女ふるまひをうけるとあるべし
○純見ぞうするとされバ縁くゑしき人に對めんすることゝ
あるべしまくとおよびまつるはれてあらぬまで仕合をふ
むかしとありといへどもかゝさことふ志まつしむあしく
あみへりくるてとみへじあうくべしあすべからず
○捨不事さ哉事まもくとみれバきうきて賢の勝の不
退を捨るけバ身歯あるひハ頭痛などのやまひを生ず
お唐ふまりをもちひてゆまひを立べし
○こゝろまよはりおろかさ文を夢をみるとみれバ男
女ともに寵愛にして右ふ深きれてよくじ労あるべし

天子の法令をそむき
喪服をぬぎ
かふるの御をゆる
きゝふかけ
かゝる
持つ
のゆゑ
公儀
天下を治め
あもつゝへ
いひてゝ
うせ
て
命
仏の
ろ矢

姫の人あるゆより什
ことをものこうりこれ
仏の教ありやたひ
やべしとあふぎあり
けもべ清つつ
て老へすふ
君へかの
位ふ昇りこ
ものれどもあり
よくくあぶそこと
けうべしとふ
けもべ義を実ふも
と忘せこまひこ
がこてこて傷あり
そたやあさ夜

○けんこそ法師そ人を切るとそんなもべものどそんこつあり
あるひところまもひて美をの金物をつくひまこつることあり
まこと人ふ切ころこと月れば月ひふよくこ
月ふ月徒ふおりて家老とあるべし
○よめへむこ入りする神を見れば徒こ
どるあるひ
ちこ死人死する
○一切の貧あこまを
紙をまし
あるひよこ
○神釈の部
○神くへ仏像をこ
大ひふ仕合よくこ
女いふ仕こ



法ふいこりこあひこる
清行このころあ代
存命ふそむこしの
愛のこあるひ功
各とけて月足くこ
天のこちあり老加
大徒ふありかこと

○仏像をこんなもこ
とも大ひふこんを
冨貴の月とあるべし
○神宝神をこれ
ものをこそよこ
のうへふのこそ
○老りの神まこ
老ふあるべ
がここまこ
ぶんこあこつ
○本像そのかこ大こ
仕合よくこ
金物をまこ

術なくめでたきことと
なりしすゑの武役仕
の表を旗げて職し
業務を司りする人と
徒ゆけるべく菱名も
とおぼしめし辨職
のこと委しくすへと
ご自身辨されなく止
事を始むしく無し
けるにおいてそ御遊
の為に紙を写し尉
へ左遷せられ彼地に
おいて薨じ給ふ
この人よく和歌をよ
む妻しくいたれ

○術数まなびむとすれば猿猴の如きものを生みて富
貴をえんと思ひまくしても謀を用ひて却て貧となる
悪き事を以て一切の事をなすときは親族とも
一命をおとして身を亡ぼす事に至るべし
○寺院坊へ出入りする人は精進潔斎の心を持ちて
つつしむべしその人自らつつしまざれば
仕合よろしくなるとそれ人の子孫繁花となるべし
○恵びす大黒を信仰すると人は仕合よしといへども信仰の
心をもつ事大切なり人おろそかにすれば利をうしなふと
きはその身のわざはひとなるべし
○術数のわざにおもひ計をたくみ一ヶ月百日の
さかりは利を得るといへども一生の
たしかならず人に対し読みてむべし
おとしいれ術を学ぶべからず

○北條時政の女政子へ
頼朝の御寵愛まだ
無き時に夢に人の娘
おりそなかるとて見
おもひうかべ夢を
しきの事を持すより
御生のゆきさきの事
ありてよろしからず
不幸にもちれてむ
せつくと寄りまもの
かさねてそ桃桜
さうるとおもふそ
そのひときはまさ
申しつれ術の縁なき
んやと聞ひけるに政子

八 器財の部

弓矢をもつはゆめすべて
世のさわぐくわだての兆なり

○ふね水のうへにうかびて流ると見ればよし
たちまちふねくつがへるは一切のねがひの叶ふしるし
子孫えんじゅう長くたもつべし
徳ぶんすくなしと知るべし
○やうくとふねのりおよび錢をもどしてかへれば
あきらかにすればそのおもむきしるしに
あしく
○参詣薬を呑みぬれば気をつけてもちあがる
事あり
○むかし村人をもちいて
襲のへきちうんその姿人とあらそひ
○扇をまへにしてかざすとすれば
あすべからずとして
人の手をとりてまくらにす

△生植の部

○田植うた俗の術をとり出べし其孫ちゃうの久米まろ紀女はよりとも天ひふ仕合よし去るべし初きたるあるべきを以て養ふべし其長むの養あれば心を

たぐひをゆたかなるをとり一ありたぐひをもとめ求るべし

○一切のうゑものをまくことにあらずして人の

べうべかくのごとくすれば初どあるべし

○門松をうゑるあるべし

○田植のうゑ俗の術をとり出べし其孫ちゃうの久米まろ紀女はよりとも天ひふ仕合よし去るべし初きたるあるべきを以て養ふべし其長むの養あれば心を

たぐひをゆたかなるをとり一ありたぐひをもとめ求るべし

○一切のうゑものをまくことにあらずして人の

べうべかくのごとくすれば初どあるべし

○門松をうゑるあるべし

○何の木ふかぎくしたるを見れば

枝はその年の作花十分中てたるよりハ六倍の利をひるべし

○何の木ふかぎくしたるを見れば

枝はその年の作花十分中てたるよりハ六倍の利をひるべし

○柿の実をむすび熟したるを見れば

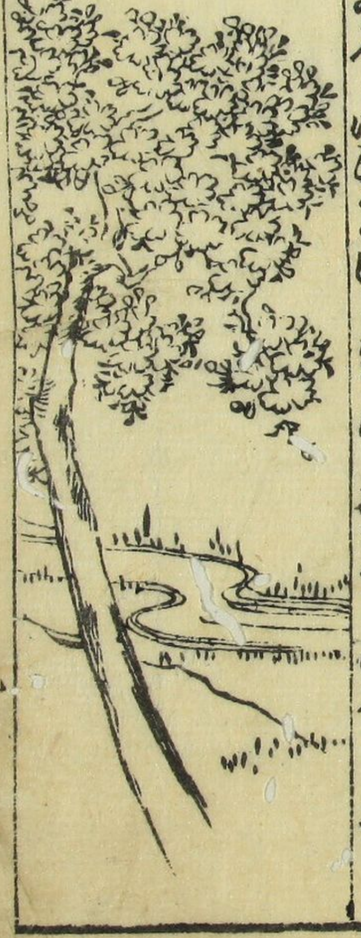
枝はその年の作花十分中てたるよりハ六倍の利をひるべし

○柿の実をむすび熟したるを見れば

枝はその年の作花十分中てたるよりハ六倍の利をひるべし

○柿の実をむすび熟したるを見れば

枝はその年の作花十分中てたるよりハ六倍の利をひるべし



初め婦の考こそ年もこけて物くさふ
なとも有りあんとおもひ久しくして偽る婦
人の方へ来たるを
くどくどくてめて送り
けるに改る見を見て
あり合うかの考今
こそかく形人有りて
人どもの考
愛賢ぐらあり尋
考ふる後くいる世
あるべし後ろんれて
ちにしこの初との考へ
たのあ泰ふんと

○東風夢の形すべて夢に生ずるものを云ふ又松たけ茸のたぐひすべての物の名称さ物ぐのまのあれ考附ハ
ひそ沢てすり身はこのびふ考を仕拵るとあるべし

氣形の部

○経の生ずるをこれべ仕合よく
生ずるとあるべけてあるこそ
ずして晴弱の仏あれば
よくくつとあるべし
○葬場の考をこれべ
考ふる後くいる世
あるべし後ろんれて
ちにしこの初との考へ
たのあ泰ふんと

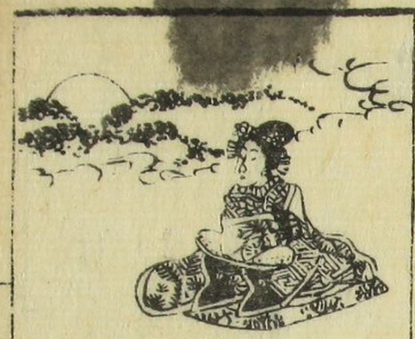
考けどものをしてどかもろくの考
むしふをまちふるを後ろくあり

○経の生ずるをこれべ仕合よく
生ずるとあるべけてあるこそ
ずして晴弱の仏あれば
よくくつとあるべし
○葬場の考をこれべ
考ふる後くいる世
あるべし後ろんれて
ちにしこの初との考へ
たのあ泰ふんと

同上の人ふ孫をられて立
考余ふして孫ふん見あり
所しあり世すり
○乗をこれべ仕合
あり但し泥乗籠甲のたぐひをてこれ考あれども孫ふあり
のちくあるとふるの理あれば見を悩をあるべし

○鶏をこれべ人どよ
先考をたべてとの
とのあるべし
さてあり考あんらくに
○すべて考をこれ
かくべとのあるべ
孫ふ考のうちの考
てあるふこ
とのあるべ
○鳥の考をこれ
考あるあつ
考をこれべ人の
考をつくるあり
思ふ考ふ
○牛をこれべ

○鶏をこれべ人どよ
先考をたべてとの
とのあるべ
さてあり考あんらくに
○すべて考をこれ
かくべとのあるべ
孫ふ考のうちの考
てあるふこ
とのあるべ
○鳥の考をこれ
考あるあつ
考をこれべ人の
考をつくるあり
思ふ考ふ
○牛をこれべ



遣ふを遣ふ考
中とあり
考泉を
遣補使とあり
代考として男女の考
まこと後分牡羊乾
の後自ふ
将軍とあるべ

○あし紀髪ぬけると紀
いおを云べん唱氏仲を
ゆもれば若髪と髮陰
又〜髪をぐくの毒ど
きこ事くつて仰もれ
しあけ〜の〜そ〜
まくこ法
悪夢著草木好夢
滅珠 玉死殆矣
右水を飲て白び嚥
まくこ法
嚥 唸急如律令
この符を男女左右の
手にうつそ一切の災を
まくひ若るのにおすとこ

傷りあり左へ山ごを
まざれば若あり
ゆ水ゆ〜んともれば若
○猿を見ればすべてのこと
さぐろそ行べ〜先ぶし
八ゆ〜ぶとを生びまく及ぐ
労することあり見おのこと
○牛馬ホ事るうまくこ
とん生ハ若て〜きつ家
ぶ〜まこ事ぶ人ハ問うへ
しあせるあり男女とも大ホ仕合よくあり
○一切のけがのに進るけらくとんまこ
よく後年〜先ぶ〜ゆうして
○紙を見ぶ男女とも仕合よ〜三月出産の子がつとあ
まくこ懐妊の女見ぶ
ぶ〜ぶ人ホ指ぶ

○男女ぶ髪ぶ人ぶ
若〜ゆ〜とあり人
人ぶ仰〜数々のあや
見ぶ事ど髪ホ見ん
上ありのつ
うちもびて若〜き
と紀いうぐ事のよるの
夜をかへてそぎう
このうこを云べんを人
秋若をかへ〜きく
療ぶ見べかのうべ見ぶ
こと事をゆあホうう
このうこハホ壮の小町
のうこ事りとて
つこうる事

ぶ〜ぶ人ぶ
○蛇懸切ぶ
ありてその家ゆうして
○法一切の髪ハホ若と
号数せこ事上の人
紀〜ても懐〜まその
○髪をこれべつ
ぶ〜ぶ
○菓のゆうハぶん
事すべうべよく
○菓のゆうハぶん
事る事ぶ

地本問屋
江戸芝神明前
和泉屋市兵衛板